

[英語教育21世紀叢書]

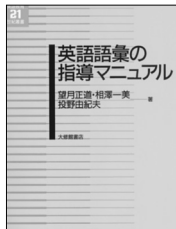
英語語彙の指導マニュアル

望月正道／相澤一美／

投野由紀夫 著

八島 等

(東京都立晴海総合高等学校教諭)



本書は最新の語彙研究の成果が平易にかつ丁寧に説明・解説されている画期的な本であり、英語教師の必読書と言える。語彙研究は無視されていた時期もあったが、ここ10年ほどで大いに注目を集める研究分野となった。その証拠に、学会でも、ここ数年、語彙に関する発表が数多くなされている。

その理由は何か。学習者が教師にする質問の中には必ず次のような語彙に関するものがあるからである。

- (1)「大学入試や TOEIC に対処するには何語程度覚えればよいのですか。」
- (2)「英語母語話者との会話を楽しむには何語程度必要ですか。」

このような質問は学習者にとっては極めて素朴なもので、教師は当然明快に答えてくれるものと思っている。それに対して、教師は大抵、自分の経験から学習者に答える。しかし、教師にとって、どの質問も確信を持って答えることが非常に難しい。そこで、経験知として言われていることを実証するための研究が盛んになされるようになってきたのである。本書はそのような実証研究の成果を実際の指導に活かすことを目的としている。したがって、上記のような質問に答えることが難しい理由とその答えと言える事柄について本書には明快な説明・解説があるのでありがたい。

例えば、質問の(1)については、第1章を読むと、「何が1語か」ということをはっきりさせなければ、答える教師によってまったく違った数になってしまうことがわかる。すなわち、walk, walked, walking, walks を1語と見るか4語と見るか、happy, happily, happiness, unhappy, unhappily, unhappiness は1語か6語かで、語彙サイズはまったく違

ったものになることがわかる。

質問の(2)に関しては、第2章に英語母語話者の語彙数の推定方法とその研究結果が上記の(1)の議論を踏まえて述べられている。さらに、カバー率が示されていて、最もよく使われる2,000語を知っていれば、会話の約94%は理解できることがわかる。その上、語を「知っている」ということには、その語を受容的に「知っている」ことから発表的に「知っている」まで、知識の深さに差があるということもわかる。

以上のように、本書を活用すれば、最新の語彙研究の見地から学習者の質問に答えることができる。その上、本書には、語彙習得のプロセスや語彙指導に関する章もあり、さらには、第2, 3章には「指導へのヒント」というコラムが節ごとにある。こうした配慮は本書の著者が単なる理論や実証研究の成果を羅列するだけにとどまらずに、理論を実践につなごうとする意欲の現れであり、読者には大いに参考となるに違いない。コーパスの活用法や語彙テストの作成法、語彙サイズテストまでもが掲載されている。まさに、至れり尽せりである。

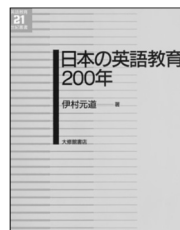
[英語教育21世紀叢書]

日本の英語教育200年

伊村元道 著

河村和也

(東京女学館中学校・高等学校教諭)



「歴史嫌い」の英語教師に

私事で恐縮だが、今でこそ英語教育史の学会に身を置く私ではあるけれど、高校生の頃は「歴史」にそれほど興味を持ってはいなかった。教科書の中身は大昔から今へとつながっていたが、まだまだ「昔」のうちに1年は終わってしまい、「今」へのつながりはついで見えないままだった。つまり、歴史とは今とは切り離された昔のことを、遠くに置いて眺める、あるいは覚えるものだと思っていた。

失礼を顧みず申し上げるなら、英語の先生の中にも歴史が苦手だった方は多いようだ。英語教育の歴史の本など、進んで手に取られる方にはなかなかお目にかかれない。それよりも、新しい教授理論や指導技術の手引き書に心が惹かれるという方のほうが圧倒的に多いのではないだろうか。

教科書的でない歴史書を

今、手許に『日本の英語教育200年』という本がある。『パーマーと日本の英語教育』（大修館書店）で豊田實賞を受賞された伊村元道先生の新刊である。タイトルを見て、日本の英語教育が200年の歴史を持っているのかと少し驚くが、まずは、本書が英語教育を学校教育の枠組みにとどまらず、幅広くとらえていることに着目したい。

英語教育の歴史を扱った本というと、それこそ高校時代の教科書のように、今とは切り離された史実をずらずらと書き連ねてあるようなものを想像するが、この本はまったくそういうものではない。15の章がそれぞれにテーマを持ち、いわば「縦割り」に通史を語る役割を果たしている。テーマとは、日本人と英語との出会い、英文法、発音と発音記号、教授法、学習指導要領、教科書、試験と試験問題、辞書、外国人教師、小学校英語、雑誌、英語存廃論などで、どの章でも、過去から現在、そして未来へとつながる英語教育の歴史が、極めてコンパクトによく整理され、豊富な図版と平易なことばでつづられている。

未来への問題提起の一冊として

この本の特徴のひとつは、各章の多くが未来へとつながる問題提起で締めくくられていることだ。「歴史」を懐古趣味に終わらせず、現在と未来へとつなげていこうとする著者の思いが伝わってくる。

「国際的な競争社会を勝ち抜くためのツールとしての英語を身につけさせることが英語教育の真の目的である」などという言説が大手を振ってまかり通る今日だからこそ、英語教育の現在と未来を、しっかりと歴史を踏まえて考えてみたい。英語教育の歴史を知ることとは「なぜ英語を学ぶのか」という繰り返されてきた議論に一筋の光をあてるものなのだと信じたい。

英語教育 10月増刊号

〈特集Ⅰ〉ハリー・ポッターの
イギリス

〈特集Ⅱ〉英語教育資料2003年版



藤山 京

(大阪府寝屋川市立友呂岐中学校教諭)

私にとっては表紙の特集見出しだけを目にしても、胸がどきどきするような、まさに「増刊号」である。特集Ⅰでは「ハリー・ポッターのイギリス」とあり、月刊誌の方は毎月買って学校の本棚に並べてあるだけでなんとなく勉強した気になって安心してしまっただが、この号は机の上に出せばなしで授業の合間に読むことができた。

『ハリー・ポッターと賢者の石』が日本語の版で出版されて間もない頃、友達に薦められてあまり気乗りしないまま読み始めたことを思い出す。読んでみたら、あっという間に物語の世界にひきこまれていた。自分の生徒にも、本を読んでイギリスの生活や英語に少しでも興味を持ってもらいたくて、学級文庫に並べるようになった。そんなふうに「ハリポタ」の自分だけの楽しみ方で満足していたが、今回の増刊号の記事を読んでみると、ハリー・ポッターを通して見るイギリスという国と文化の面白さが、あらゆる切り口から見えてくる。

特集Ⅱの「英語教育資料2003年度版」では、「マルチメディア教材活用法」に注目したい。テレビ番組の紹介から海外交流支援サイトまで、幅広く親切な情報を得ることができる。紹介されているなかのひとつ、e-pals というサイトは私も昨年見つけて、「なんて便利なものがあるのだろう」と驚いたが、他にもこんなにたくさんの便利サイトがあったとは、もっと早く月刊誌の方からチェックするべきだった。しかし、この増刊号では必要な情報がコンパクトに掲載されている。

2つの特集以外にも、SELHi 報告や小中高一貫英語教育をめぐる座談会もある。明日からの授業づくりのために、もっと知りたい、もっと生徒たちに伝えたいということが必ず見つかる一冊である。